Finger-painting (5)
—特殊児に施行せる結果—

大阪市立大学
小西勝一郎
並河信子
山田聖子

指絵による人格診断上の基本的資料を得ようとして、施設児、精薄児、虚弱児、精神病児などの特殊児の指絵と普通児の指絵とを、年令・性・人数を同じにして比較した。なお Dörken が H.Lehman の方法によって客観的な評価尺度を定めているのでその妥当性を吟味しようとした。

次のような有意な差が認められた。

(1) 施設児と普通児の比較（施設児四三名）
普通児に比べ施設児には、画面全体を混色する。人差指だけでかく、画面全体を用いない、すぐ描き始めない、という者が多い。

(2) 精薄児と普通児の比較（精薄児四四名）
普通児に比較して精薄児では、最初の選色は緑が少なく、三種以上の運動をしない、画面全体を混色する、人差指だけでかく、表現内容が第三者にわかりにくい、表現した物の数が少ない、描画時間が短い、描画中に水や手拭を用いない、などであるものが多い。

(3) 虚弱児と普通児との比較（虚弱児二十六名）普通児に比べて虚弱児には、青・茶・黒・紫の使用するものが少なく、色彩の使用数も少ない。画面の一部の混色も少ない。描画時間も短く、家に自分のかいた絵を持って帰りたいというものが多い。

(4) 精神病児（十二名）
精神病児の最初の選色は赤や橙が多い。人差指だけでかく。描画面積も少なく、描画内容は支離滅裂であるなどの者が多い。

Dörken が使用した評価尺度による結果は、普通児に比べ施設児では clarity が低い。精薄児は clarity と Contact of reality が低く虚弱児は Affective range が低い。精神病児では Energy out put, Contact of reality, clarity, Affective range が低い。この評価尺度については検討の余地があるように思われる。

上述の結果は必ずしも期待されるような傾向を示したとも云えないが、更に検討していきたい。

自画像の発達的研究

お茶の水女子大学
松村康平
田川朝子